

弥一郎は二階の小部屋に案内された。行燈に

火を灯そうとして入ってきた女中に小銭を握らせたあと、何食わぬ顔をして尋ねた。

「医師、向山周慶どのが甘蔗の栽培を手がけ

ておられるのは、どの辺りであろうかの」

その途端、女中の愛想笑いが消えた。

「甘蔗ってなんやろか。虚無僧さんはどこか

らおいでた方ですか……」

そうして、用事がすむと足早に部屋を出て、

る薪の陰に潜んだ。

いつのまにか雪がちらつき始めている。空腹

も手伝ってか、足の裏から寒さが胃の腑を突き

上げてくるようだ。弥一郎は思わず足踏みをし

た。小脇に刀を抱えて、物陰からじっと表通

りを窺っていると、目が薄暗闇に慣れた頃、捕

り物提灯が三つ、小刻みに揺れながら近づいて

きた。先刻出ていった男に先導されて村役人が

二人、そのあとに、六尺棒や刺股を持ち、尻を

からげた捕り方が数人、狭い玄関口からなだれ

階段を軋ませながら下りていった。弥一郎は静

かに襖を開け、階段の縁まで行つて下を覗く

と、さっきの女中が宿の主人と低い声で話を

している。そのうちに、下働きの男が何か耳

打ちされて、足音を忍ばせて出ていった。

弥一郎は、慌ててほじきかけていた脚絆を巻

きなおし、笈を背にして窓から屋根に躍り出

た。擦り切れた足袋が板瓦の上で滑りそうにな

つたのをかろうじて踏みとどまり、数間先の

風呂炊き口の横に飛び降りて、高く積まれてい

込んでいった。

〈面倒なことになった〉

と、弥一郎は思った。これほど警戒が厳しい

とは思っていなかったのである。もはや逃げるし

かない。情けないことに、そのとき腹の中で頼

りない音がした。昼時に握り飯を二つ、歩きな

がら口に入れただけだった。弥一郎は、すばやく

厨房に忍び込み、飯櫃を抱え込んだ。板前と

年増女がいたが、二階に駆け上がってゆく村

役人たちを目で追っていて気づかない。弥一郎

は厨房を飛び出て、天蓋を被りながら裏道を抜
けて街道を突つ切り、近くの山裾に入つていっ
た。

〈どうもよく分からん〉

半月後、湊川下流の河原で、弥一郎は物思い
にふけっている。虚無僧の白衣を脱ぎ捨てた
浪人姿である。村は平穏な朝の冷気に覆われて
いて、役人の姿もない。

川はゆったりと流れ、少し離れたところに

〈分からん〉

弥一郎は、もう一度繰り返して大きな吐息を
吐いたあと、朝飯代わりにもらった大根を頬張
った。

このところ、弥一郎の頭を悩ませているの
は、奄美出身の郷土関良助なる者が、どうし
て、^{「死罪もしくは遠島」}という重罪を犯して
まで甘蔗の苗を藩外に持ち出したか、というこ
とである。

粗末な橋が架かっている。三枚ほどの杉板を縦
に並べ、鎖や荒縄でつないだもので、両手の
ひらを広げたほどの幅しかない。湊村住民の
生活のために生まれた橋らしい。対岸の向こう
の道は白鳥神社へと通じていて、時折、白衣に
脚絆姿の老若男女が、金剛杖を打ち鳴らして
通つてゆく。

こちらの岸辺では、百姓女が数人、足桶を
はいて、軽口を叩きながら冷たい流れの中で
大根を洗っている。

自分にできたのは、せいぜい家を捨てて脱藩
したことだけだった、と弥一郎は自嘲したあ
と、目の前に広がる河原を眺めた。かの者は、
あの辺りに行き倒れていたという。そこを、藩
の要請を受けて白糖作りにいそしんでいる
向山周慶という医師に救われた。その恩を見事
に返したのだ、と小銭を握らせた地元の蜆売り
の男が誉めておったが、果たしてそうなのか。
弥一郎にとっては大きな謎である。それくらい
で武士が命を賭けるだろうか。それとも金のた

めか。

「いや、そうではあるまい」

弥一郎は髭の伸びた顎をこすった。昨年さくねんの

冬、関良助が、向山周慶を助けて念願の白糖

製造に成功したとき、高松藩からお褒めの言葉

とともに褒賞を約束された。それが、一人扶持

だそうである。蜷売りは、自慢そうに鼻をひく

つかせていたけれど、中間や小人ですら、そ

のうえに年十俵以上もらえる。高松藩では

財政が逼迫している、と弥一郎は大坂の商人た

ちから情報を得ていた。このたび藩の窮乏を

救う白糖製造に初めて道を開いた功労者に与え

る処遇としては、あまりにも少ない。だが、と

弥一郎は首を捻って考える。

「関良助のもくろみ違いということもある」

女たちが大根を洗い終えたのか、足桶をはず

すのが見えた。意外に白い素足が、水面から照

り返す朝日に映えている。

弥一郎は急に人肌が恋しくなった。

「今宵のねぐらを用意しておかなければ……」

自分に言い訳しながら、他の女どもが土手の

背後に消えていったあとも、足桶を丹念に洗っ

ている三十路近い女の、ふくよかなふくらはぎ

に引き寄せられるように近づいていった。女が

顔を上げて弥一郎に気づき、はにかんだように

笑った。弥一郎の胸の奥に情愛のたぎりが生

じた。女のくれた大根の甘酸っぱい味が喉元に

戻ってきた。

八

(注) 小人(こびと) は江戸時代の諸藩の職名で雑役に従事した役をさす。

それから数日後の屋下がり、弥一郎は、農家の

牛小屋に積まれた藁を掻き分けて起き上がった

た。このところずっと、関良助や向山周慶た

ちが白糖作りのために甘蔗の汁を絞り、それを

煮炊きしている小屋の周りをうろついている。そばには畑仕事の前まえに女おんなが置いていった朝飯あさめしがある。飯めしに風呂吹ふろふき大根だいこんと大根だいこんの古漬ふるづけといった質素しつそな物だ。もうすっかり冷つめたくなっているが、味あじに工夫くふうがしてあるのか、意外いがいと旨うまい。

「女おんなにもいろいろあるものだ」

梅うめという百姓ひやくしようおんな女おんなのよそった大盛おおもりの飯めしを口くち一杯いっぱいに頬張ほおばりながら、弥一郎やいちろうは考かんがえている。どういうわけか梅うめに気きに入いられてしまった。妻つまの佳代かよを失うしなったから、褥しとねを共にした女おんなは数少かずすくな

鼻摘はなつまみ者ものだが、いまの自分じぶんにとっては実じつにありがたい存在そんざいだ。よそ者ものと分わかっても気きに留とめず、腹はらが空すいたろう、と大盛おおもりの飯めしを振ふる舞まつてくれる。おまけに情じょうも濃こい。弥一郎やいちろうは、昨夜さくやの大胆だいたんな女おんなの姿態したいを思おもい出だして身からだが熱あつくなつた。

それにまた世間せけんには、母ははのように地位ちいや名譽めいよを求めもとめる心こころが人ひと一倍強はつちよく、そのために、夫おととや子こさえ軽かろんじて我がを通とおそうとするような女おんなも、案外あんがいと多おほいのではないだろうか。

い。だが、それでも弥一郎やいちろうにとって、馴染なじんだ女おんなたちの気性きしょうの多様たようさに大きな驚おどろきがある。妻つまの佳代かよは、おとなしいが遣やり繰くり上手じょうずでよく尽くしてくれた。裏長屋うらながやで親切しんせつになしてくれなく面倒めんどうをみてくれた津根つねは、酒乱しゅらんの亭主ていしゅを抱かかえた心こころの寂さびしさを紛まぎらすためとは言いえ、細こまやかな情じょうを注そそいでくれた。

此この度たびかくまってくれている梅うめは、隣となり村むらの農家のうかに嫁よめいでいたが、大飯おおめしを食くらい過すぎるとい理由りゆうで返かえされた出戻でもどりである。無論むろん、実家じっかでは

弥一郎やいちろうの思考しこうが、あらぬ方向ほうこうに飛とんだ。

「しかし」

と、彼かれは考かんがえている。物事ものごとには絶たえず二つふたつの面めんがあるような気がする。母ははにしても、地位ちいや名譽めいよをあがめる人ひとたちからすると、ごく普通ふつうの人間にんげんだろう。実じつのところ、弟おとうとからすると、見み返かえりを期待きたいせず、いつまでも見守みまもつていてくれる親鳥おやどりのようなありがたい存在そんざいなのだ。長屋ながやの津根つねも、飲のんだくれの亭主ていしゅや心優こころやさしい本人ほんにんを知しらない世間せけんからすれば、単たんに身み持もちの悪わるい女おんなと

して片付けられてしまう。梅にしてみても、

自分にとっては力強い味方だが、高松藩や

関良助たち、薩摩の甘蔗を栽培することによつ

て白糖を製造しようと心血注ぐ者たちから見

れば、とんでもない裏切り者だと言えるだろう。

年を重ね、多少とも世の中の辛酸を舐めたこ

とによつて、弥一郎の心に、いつしかひとりの

人間として、物の見方に幅が出てきていたのか

もしれない。

弥一郎は、いつのまにか、そんな訳の分からな

いことを考え始めている自分に苦笑した。それ

から、柔らかそうな大根を箸の先で摘み上げ、

練り味噌を塗って舌の上に載せた。旨かった。

あとは考えるのを止め、椀を舐めるようにして

食べた。八年前に、丹波亀山藩で普請組に勤め

ていた時分には想像もつかない、武士らしから

ぬ食し方である。

「これをあの口やかましい母が目にしたらな

んと言うだろうか」

ふと、そんなことを思った。弥一郎の胸に

単食ついていた母に対する憎しみや嫌悪の情が薄

れ、わずかながら、懐かしさにも似た感情が

頭をもたげてきているのが感じられた。それは

大きな驚きだった。

「刻の流れは、人の心を懐柔してしまいうら

しい」

弥一郎は苦笑いをして、刀をつかんで立ち上

がった。

湊村の一面に、わずかに二畝ばかりの甘蔗、い

わゆる砂糖黍の畑が見られる。傍らが広場に

なっていて、収穫した甘蔗の汁を絞るのに使わ

れている。そこから幾日も離れていないところ

に、釜屋と呼ばれている小屋が建っていて、なか

に大きな釜が三つばかり置かれている。弥一郎

が昼夜を問わず、幾度も物見したところであ

る。

(以上3月4日放送分)